

Mahābhāṣya ad P1. 3. 1研究 (8)

小川英世

1. 4. 2. 1. 1. [BHĀṢYA]

【反論】 [「〈行為〉 (kriya) を表示するものが「dhātu」 [と呼ばれる]』と
 いうように術語「dhātu」が定義された場合、以上のように術語「dhātu」が
 「upasarga」 + 「dhātu」 + 接辞からなる複合体でもなく、「upasarga」と接
 辞の各項目でもなく、まさしく「dhātu」と呼ばれるべき項目に適切に適用
 されることが確立されるとしても、] それでは次のような、すなわち
 「√as・√bhū・√vidは「dhātu」と [呼ばれる、と言われるべきである]」 [と
 いうように新規規定を設けなければならないという] 誤謬は [依然未解決の
 ままで] ある。

【答論】 しかしながら、もし「bhavaを表示するものが「dhātu」 [と呼ば
 れる]」 (bhāvavacano dhātuh) とこのように規則が定式化されたとするなら
 ば、[その誤謬は回避されるであろう]。

[PRADĪPA]

「bhavaを表示するものが」: [提案された新定義規則中の] 〈bhava〉という
 語は、〈行為〉一般(kriyāmātra)を表示する。例えば、P2.3.37 yasya ca bhāvena
 [bhāvalakṣaṇam]あるいはP3.3.18 bhāve [における 〈bhava〉という語]
 のように。それゆえ、√pacなどにも√as・√bhū・√vidにも同様に「dhātu」
 という術語が適用されることが確立される。なぜなら、[両者は] bhavaと
 いう形の意味を表示するものだからである。

ノート (26)

当該の術語「dhātu」の定義規則 P1.3.1 bhūvadayo dhātavaḥ は動詞語根のリ
 スト dhātupāṭha の存在を前提し、dhātupāṭha 中に掲載されている項目が

「dhātu」と呼ばれることを述べている (pāṭhena dhātusamjñā)。カーティアーヤナは Vārttikal-2 を通じてこのような形の術語「dhātu」の適用に難点を指摘した²⁰⁰。そこで dhātupāṭha に依存しない形での定義規則が提案された。それが「〈行為〉 (kriyā) を表示するものが「dhātu」【と呼ばれる】」 (kriyāvacaṇo dhātuḥ) という意味論的な定義規則である。そしてカーティアーヤナは、この定義規則に関しても二つの難点を指摘した。その一つが「dhātu」と接辞からなる複合体 (samghāta)、「upasarga」と「dhātu」と接辞からなる複合体に対して定義規則が過大適用となるというものであり (vt.3)、そしてもう一つが存在・生成を意味する \sqrt{as} ・ $\sqrt{bhū}$ ・ \sqrt{vid} が「dhātu」とは呼ばれないことになるというものである (vt.5)²⁰¹。パタンジャリはここでこの後者の問題を取り上げる。この上記定義規則を受け入れた場合に術語「dhātu」が \sqrt{as} 等に適用されないことになるという問題指摘の根底にある考えは、次のようなものであった。Bhāṣya [シノプシス1.4.1.4] において、 \sqrt{pac} や \sqrt{path} などの個別的な項目に対する術語「dhātu」の適用の前提として、それら個別的な項目の〈行為〉 (kriyā) 表示性をいかに確立するかということが問われ、それに対する答えとして、それら個別の項目の〈行為〉表示性はそれらの \sqrt{kr} との意味間の〈同一基体性〉に基づいて確立されることが述べられた。しかしながら存在・生成を意味する \sqrt{as} ・ $\sqrt{bhū}$ ・ \sqrt{vid} には、同じ方法によって〈行為〉表示性は確立され難い。一般に「彼は何をしているのか」 (kiṃ karoti) という〈行為〉を対象とする質問に対して「彼は在る」 (asti) という返答を期待することはできないからである。そこでここに「〈行為〉 (kriyā) を表示するものが「dhātu」【と呼ばれる】」という定義に代えて、新たに「bhāva を表示するものが「dhātu」【と呼ばれる】」という意味論的定義が提案されることになるわけである。当該 Bhāṣya はその定義規則が提案される vt.9 に対する導入として位置づけられる。

言うまでもなく、この新定義規則は、 \sqrt{pac} 等ばかりでなく \sqrt{as} 等をも適用対象とするものとして提案されたものである。それではこの新定義規則中の〈bhāva〉の意味するところは何か。この問題に関して以下の Bhāṣya において

詳細な議論が展開されることになるが、ここでカイヤタは定義中の 〈bhāva〉 が P2.3.37、P3.3.18中の 〈bhāva〉 に他ならないことを述べている。P2.3.37 は、例えば {goṣu duhyamānāsu gataḥ} (「牛たちが搾乳されているときに、[彼は] 行った」) といった文における名詞語幹 〈go〉 (「牛」) の後の saptamī-vibhakti suP の生起を説明するものであり、その生起は牛と結びついた bhāva である \sqrt{duh} の意味である搾乳行為と他方の bhāva である \sqrt{gam} の意味する進行行為との間に示唆関係 (lakṣyalakṣakabhāva) があることを前提する。Kāśika は簡潔にこの 〈bhāva〉 は 〈kriyā〉 に同義であることを述べているが²⁰²⁾、この同義性は次のようにも説明できる。P3.2.126 lakṣaṇahetvoḥ kriyāyāḥ は、例えば {sayānā bhūñjate yavanāḥ} (「ヤヴァナたちは横になって食べる」) における動詞語根 \sqrt{si} (「横になる」) の後への現在分詞接辞 ŚanaC の生起を説明するものであり、この例では \sqrt{si} の意味する横臥行為が \sqrt{bhuj} の意味する飲食行為という kriyā に対して示唆関係にあることが条件になっている。パーニニはこのように動詞語根の意味間の示唆関係を条件とする文法操作の規定において 〈bhāva〉 と 〈kriyā〉 の両語を用いており、このことからパーニニが両者を区別していないことが知られるのである。さらに P3.3.18は、bhāva の表示のために「krt」接辞 GHaÑ が導入されることを規定した規則であり、これによって例えば 〈pāka〉 (「料理行為」) といった行為名詞の派生が説明される。パタンジャリはこの規則に対する Bhāṣya において、 $\sqrt{kr} \cdot \sqrt{bhū} \cdot \sqrt{as}$ は 〈行為〉 一般 (kriyāsāmānya) を表示し \sqrt{pac} 等は個別的 〈行為〉 (kriyāviśeṣa) を表示する (kr̥bhvastayaḥ kriyāsāmānyavācīnaḥ, kriyāviśeṣavācīnaḥ pacādayaḥ) と述べ、〈行為〉 一般を表示する $\sqrt{bhū}$ から GHaÑ の導入によって派生された 〈bhāva〉 による規則定式化は、当規則が個別的 〈行為〉 を表示する「dhātu」を含むすべての「dhātu」を適用対象とするということを示唆していると述べている²⁰³⁾。これによれば当規則中の 〈bhāva〉 はまさしく 〈行為〉 一般を表示するものに他ならない。そして 〈行為〉 一般としての bhāva には \sqrt{as} 等の意味も包摂される。 \sqrt{as} に対する P2.3.37、P3.3.18の適用によってその派生が説明される項目が実際の言語運用 (prayoga) の場に見いだされるのである²⁰⁴⁾。例えば itasmin

saty āgataḥ] (「彼があるとき [デーヴァダッタが] 来た」) においては、 \sqrt{as} の意味と $a\sqrt{gam}$ の意味との間に示唆関係があり、もし \sqrt{as} が *bhāva* を意味しないとするならば P2.3.37 の適用はない²⁰⁵⁾。また、 \sqrt{as} あるいは \sqrt{bhu} が〈行為〉一般としての *bhāva* を表示するからこそ、それらが *bhāva* を意味条件とする P3.3.18、P3.3.114 の適用を受け、〈*bhāva*〉〈*bhavana*〉が派生されることは言うまでもない²⁰⁶⁾。

ところで、〈*bhāva*〉が〈*kriyā*〉と同義なものとして、しかも \sqrt{as} 等の意味をも包含する概念であるとするならば、〈*kriyā*〉という語による定義も \sqrt{as} 等に適用されるはずである。ここに新定義規則が提案される理由は一体何か。

ここでカーティアヤーナの言明 vt.3 ad P3.1.87: *karmasthabhāvakānām karmasthakriyānām ca* に注目されたい。これは、例えば {*pacyata odanam svayam eva*} (「粥がおのずから煮える」) といった自動・再帰用法における {*pacyate*} の派生を説明する P3.1.87 の適用対象が、それが表示する *bhāva* あるいは *kriyā* が〈行為主体〉ではなく〈目的〉に存する「*dhātu*」に限定されることを述べたものである。パーニニ文法学の伝統では、意味論的に「*dhātu*」を「他動詞」(*sakarmaka* 「〈目的〉を有する「*dhātu*」」)・「自動詞」(*akarmaka* 「〈目的〉をもたない「*dhātu*」」)に区分するのとならんで、「*dhātu*」の意味の〈行為主体〉と〈目的〉に対する作用様態の違いから *karmasthabhāvaka*・*karmasthakriyā*/*kartṛsthabhāvaka*・*kartṛsthakriyā* というように区分する。カイヤタはこのような「*dhātu*」区分における *bhāva* と *kriyā* を次のように説明している。

「運動 (*parispanda*) を伴わない〈能成者〉によって実現さるべき「*dhātu*」の意味が *bhāva* であり、一方運動を伴う〈能成者〉によって実現さるべき [「*dhātu*」の意味] が *kriyā* である」²⁰⁷⁾

例えば見るとか聞くとといった知覚行為は *bhāva* であり、料理行為等は *kriyā* であるが²⁰⁸⁾、もしこのように *bhāva* と *kriyā* の区別を前提すれば、包括的定義を目的とした当該の定義規則はその意義を失うことになる²⁰⁹⁾。そこでナーゲーシャは次のように説明している。

「〈*kriyā*〉という語は慣用的に運動を伴う〈能成者〉によって実現さるべき

ものの意味で使用される。そして 〈bhāva〉 という語は、慣用的に運動を伴う〈能成者〉、運動を伴わない〈能成者〉のいずれかによって実現さるべきもの〔意味で使用される〕²¹⁰⁾

このナーゲーシャの bhāva 解釈の背景にある考えは以下のヘーラーラージャの言明に通ずるものである。バルトリハリは、「dhātu」が kartṛsthābhāvaka であるのか karmasthābhāvaka であるのかの基準を述べて次のように述べている。

「[何らかの] 特性 (viśeṣa) が [〈行為主体〉と〈目的〉の] いずれに現認されるかに応じて kriyā が区別される」²¹¹⁾

ヘーラーラージャは、この詩頌において本来ならば 〈bhāva〉 という語が使用されるべきなのに何故にバルトリハリは 〈kriyā〉 という語を用いているのかを説明して次のように述べている。

「何らかの特性が現認されるのが〈行為主体〉なのか〈目的〉なのかに応じてのみ kriyā が区別される、と理解すべきである。[Bhāṣya に対する] 注釈の作者 [であるバルトリハリ] は、kriyā は運動を伴う〈能成者〉によって実現さるべきものであり、bhāva は運動を伴わない〈能成者〉によって実現さるべきものであるという [kriyā と bhāva の] 違いを顧慮することなく、文法規則の定式者 [であるパーニニ] の意図に従って、kriyā もまた 〈bhāva〉 と呼ばれるということを [当該詩頌中の 〈kriyā〉 という語の使用によって] 意図している。」²¹²⁾

ポイントは、〈bhāva〉 と 〈kriyā〉 は同義であるが、運動概念を軸として両者を見た場合、〈bhāva〉 の外延の方がより大きいということなのである。この意味で、その 〈bhāva〉 という語の使用による「dhātu」定義規則は√pac 等ばかりでなく√as 等にも適用可能となるのである²¹³⁾。

1.4.2.1.2. [BHĀṢYA]

【問い】しかし、どのようにして√pac などが bhāva を表示すると知られるのか。

【答え】これら [√pac など] の√bhū との間の [意味間の] 〈同一基体性〉²¹⁴⁾ [に基づいてそう知られる]。[bhavati pacati] (「料理している者が在る」)、[bhavati pakṣyati] (「料理するであろう者が在る」)、[bhavaty apakṣit] (「料理

した者が在る」)²¹⁵⁾ [「というように、両者の意味間には〈同一基体性〉が成立する]。

[PRADĪPA]

「[bhavati pacati] (「料理している者が在る」)」: $\sqrt{bhū}$ は〈自己保持〉(ātmaḥvaraṇa) を表示する。そしてこの〈自己保持〉は、〈料理人性〉(pācakatva) [・〈進行者性〉(gantrtva)] 等といった [互いに] 対立しかつ同一の事象に内属 [関係で関係] する [諸属性と] 対立なく同一の事象に内属 [関係で関係] する (viruddhaikārthasamavāyaiḥ pācakatvādibhir²¹⁶⁾ aviruddhaikārthasamavāyam)。例えば、「白い色」({śuklaṃ rūpaḥ}) という場合、白さという属性 (guṇa) には白さ性 (śuklatva) [という普遍] と色性 (rūpatva) [という普遍] が存在するから、「白い」(śukla) 等の [語] は色 (rūpa) を表示する。同様に、 \sqrt{pac} 等は bhāva を表示する、という意味である。

ノート (27)

ノート (26) で明らかのように、新定義規則中の〈bhāva〉は、その語を用いたパーニニ自身の規則定式化の実際とその慣用的な用法より \sqrt{as} 等の意味を含む〈行為〉一般を意味するものと解される。次にはその〈bhāva〉という語によっては $\sqrt{bhū}$ の意味が意図されているという立場からの解釈が展開されることになる²¹⁷⁾。

さて、 \sqrt{kr} との意味間の〈同一基体性〉を根拠とした \sqrt{pac} 等の〈行為〉表示性の確立の場合と同じように、ここにおいても \sqrt{pac} 等の bhāva 表示性の確立の根拠が $\sqrt{bhū}$ との意味間の〈同一基体性〉に求められる。bhāva は $\sqrt{bhū}$ の表示対象とみなされるとしても、 \sqrt{pac} の表示対象とはみなされ難いからである。〈pac〉等の項目が「dhatu」と呼ばれるためには、それらもまた bhāva を表示するものでなければならない。

$\sqrt{bhū}$ が〈自己保持〉を表示するという考えを、バルトリハリは次のように述べている。

「[あるものが] 自己自身によって自己を保持しているとき (ātmanam ātmanā

bibhrat)、それは「ある」(asti) と呼ばれる。そしてこの [√as という「dhātu」] は、[それ自身の意味のうちにその自己という形の〈目的〉を] 含んでいるから、その [自己という形の] 〈目的〉によって〈目的〉を有する [「dhātu」、すなわち他動詞] (sakarmaka) とはならない。」²¹⁸⁾

これは Nirukta に提示される生・有・変異・成長・衰・滅の六種の存在様態 (ṣaḍbhāvavikāra) のうちの以下のような「有」(asti) 理解に困ったものである。

「『ある』(asti) という [語] は、生起したもの (utpanna) の存在性 (sattva) に対する制限 (avadhāraṇa) を表示する」²¹⁹⁾

そしてこの Nirukta の言明をヘーラーラージャは次のように説明している。

「『生起したもの (utpanna) の存在性 (sattva)』 (utpannasya sattvasya) という [表現] は、[存在性が] 生起 (janman) の後時帯に属するということを明示している。『制限』とは確定 (niścaya) のことである。[そして] 『それがある』(asti) とは、『それが自己をあらしめている』 (ātmanam bhāvayati) [あるいは、『それが自己に存する存在性をもたらしている』] ということである。そしてこの [自己自身によってもたらされるところの存在性は、前刹那の [刹那的な部分的存在性] の滅と後刹那の [刹那的な部分的存在性] の生起を通じて、連続 (santāna) をなして起こるから、[〈行為〉に] 含められる。そして類似した [刹那的な部分的存在性] が連続的な流れをなしている限り、存在性 (bhāva) には区別は認められないから、[その存在性は] 制限のために『ある』(asti) というように表示される。[したがって] 『それがある』とは、『それは滅しているのではなくてまさに自己を保持している』 (ātmanam bibharti eva na dhvaṃsate) という意味である。」²²⁰⁾

このように〈自己保持〉は、√bhū あるいはその同義語の意味として滅 (dhvaṃsa) と対立をなす概念である。そしてそれは明らかに√jan の意味としての〈自己獲得〉 (ātmalābha) の概念と平行なものである²²¹⁾。それでは Bhāṣya の言う√bhū と√pac の sāmānādhikarāṇya はどのような構造なのであろうか。〈属性表示語〉 (guṇavacana) である〈sukla〉(「白」) といった語には三通りの対象表示様式が考えられる。すなわち、それが白さという属性の普遍

(*guṇajāti*) としての白さ性を表示する場合、白さという属性 (*guṇa*) を表示する場合、そして白いもの、すなわち白さという属性を有する〈実体〉 (*dravya*) を表示する場合とである²²²⁾。当該 *Bhāṣya* の解釈においてカイヤタはこれらのうちの第一の様式を想定して説明を展開している。「白い色」という表現は、属性である白さという単一の基体に白さ性という属性の普遍と色性という普遍が存していることを表している。カイヤタによればこの場合、白さ性という属性の普遍を表示する (*sukla*) という語は、自己の表示対象と基体を同じくするその色性をも表示すると考えられるのである。これが 〈*sukla*〉 という語の色性表示の根拠としての *sāmānādhikarāṇya* 構造である。

これと同じことが {*bhavati pacati*} の場合にも当てはまるのである。カイヤタによれば、ここにデーヴァダッタと呼ばれるひとがいるとして、彼はある時には料理をし、またある時には村に行く。彼は同時に料理をしかつ村に行くという行為をなすことはできないという意味において、彼のもつ料理人性と進行者性は相対立する。しかしながら、彼は料理している時も村に行きつつある時も常に「ある」のであり、〈自己保持〉から離れることはないのである。〈自己保持〉はナーゲーシャの言い方を借りれば、普遍的に存在する属性 (*kevalānvayin*) だからである。

ナーゲーシャは次のように説明している。

「そして〈自己保持〉は、第六番目の存在様態 (*bhāvavikāra*) [すなわち、滅まで] 一貫した、「有」(*sat*) という知に基づいて知らるべき (*sad iti pratyayavedya*) 相である。そしてそれは、普遍的に存在するもの (*kevalānvayin*) であるから、事象一般 (*padārthamātra*) と基体を同じくする (*sāmānādhikarāṇa*)。そしてこのような場合、[ある] 基体 (*āśraya*) [*x*] に関して料理行為が理解されるとき、その [*x*] と基体を同じくする〈自己保持〉もまたその [*x*] に存在するということに基づいて、√*pac* 等はその [自己保持] を表示する [と知られる]。例えば、白さという属性には色性があるということだけで、「白い」等の [語] は色を表示する [と知られる]。」²²³⁾

「そしてこのような場合、{*pacati bhavati*} 等 [の文] からは、「料理行

為の〈行為主体〉[すなわち、料理行為の基体]である x を〈行為主体〉とする存在性 (sattā)』(yatkarṭṛkā pacikriyā tatkarṭṛkā sattā) という認識 [が得られる]。そしてこのような場合、 $\sqrt{bhū}$ と \sqrt{pac} の意味がまさに同一の基体に存するということ (ekādhikaraṇavṛttitva) が、 $\sqrt{bhū}$ と \sqrt{pac} の sāmānādhikarāṇya である。」²²⁴⁾

こうして、当該 Bhāṣya によれば、 $\sqrt{bhū}$ と \sqrt{pac} の意味間の〈同一基体性〉、すなわち、 $\sqrt{bhū}$ の意味である〈自己保持〉と \sqrt{pac} の意味である料理行為が〈行為主体〉であるデーヴァダッタという同一の基体に存するということを根拠として、 \sqrt{pac} が自己の表示対象であるその料理行為と基体を同じくする〈自己保持〉を表示する、と考えることができる。しかしながら、パタンジャリ自身 {bhavati pacati} 等における $\sqrt{bhū}$ と \sqrt{pac} の意味間の関係は〈行為主体〉を基体とする〈同一基体性〉ではあり得ないことを述べることになる²²⁵⁾。

1.4.2.2.1.1. [BHĀṢYA]

[問い] しかしそもそも、bhāva とは何か。

[答え] $\sqrt{bhū}$ の本来的な [その] 語 [自身] から [理解される] 意味 (svapadārtha) であり、〈存在〉 (bhavana) が 〈bhāva〉と [呼ばれる、というように分析される] (bhavanam bhāvah)。

[反論] もし $\sqrt{bhū}$ の本来的な [その] 語 [自身] から [理解される] 意味である〈存在〉が bhāva であるとするなら、[bhāva と] 相容れないもの (vipratīṣiddha) ²²⁶⁾ [を意味する項目] には術語「dhātu」の [適用] は結果しない。破壊 (bheda)、切断 (cheda) [は bhāva と相容れない]。なぜなら、bhāva (存在) と abhāva (非存在) は相互に異なるからである。そして bhāva と abhāva は相互に異なるというこのような理由から、実に、 x の bhāva を望む者は x の abhāva を望まないし、 x の abhāva を [望む者は] x の bhāva を [望ま] ない。

[PRADĪPA]

「しかしそもそも、[bhāva とは] 何か」：もし bhāva が 〈行為〉 (kriyā) そのものであるとするなら、[「行為」を表示するものが「dhātu」と呼ばれ

る」という見解に代えて「bhāva を表示するものが「dhātu」と呼ばれる」という見解を別に述べることは無意味であるし、たまたま [bhāva が〈行為〉とは異なるとするなら、[新たな見解として述べられたその新定義規則は] 過小適用 (avyāpti) となる、[という意図からこの] 質問が発せられている。

「本来的な [その] 語 [自身] から [理解される] 意味 (svapadārtha)」：「本来的な」(〈sva〉) という語は転義的な意味 (upacaritārtha) を排除するために言及されている。[確かに] 二次的な [意味] も語から [理解される] 意味ではあるが、本来的に [語それ自身から理解される意味] ではない。なぜなら、[二次的な意味の理解にはある特定の語があってもそれ単独では理解されないという] 逸脱があるからである。「語」(〈pada〉) という語は、[意味の理解に際し] 文脈 (prakaraṇa) 等を期待することがないということを理解させるために言及されている²²⁷。〈存在〉(bhavana) が 〈bhāva〉 [とよばれるという] 分析 (vighraha) は、〈行為主体〉の意味での語形成 (kartṛsādhana) を排除するためである²²⁸。瓶等の滅 (vināśa) が破壊 (bheda) であり、縄等の滅が切断 (cheda) である。そしてそのような [滅] は、bhāva (存在) と矛盾するもの (bhāvavirodhin) である、というのが根底にある考えである。

ノート (28)

当該 Bhāṣya のポイントは、bhāva とは何かという問いに対して、それは √bhū の本来的なその語自身から理解される意味 (svapadārtha) であるという答え方をしている点にある。これはパタンジャリが √bhū の意味として互いに相容れないもの (vipratīṣiddha) が理解される可能性があるということを前提していることに他ならない。パタンジャリは、「dhātu」の多義性 (anekārthatva) を認めており、例えば同じ √sthā (sthā) であっても、それが進行行為とそれと相容れない進行行為の排除、すなわち静止行為を意味することを指摘している²²⁹。しかしながら、√sthā (sthā) から進行行為が理解されるのはそれが標示者である「upasarga」(pra) と共使用されたときであり、それ単独では静

止行為が理解される²³⁰⁾。したがって、パタンジャリが、 $\sqrt{bhū}$ に関しその意味をその語自身から理解されるものここで限定するのは、標示対象としての意味を排除することを意図しているのである。

ところで多義性 (anekārthatva) に依拠するならば、「dhātu」に如何なる意味でも想定できるかと言えば、そうではない。多義性の原理が機能しない場があり、その場では「dhātu」に lakṣaṇā (二次的表示機能) を認めざるを得ないことになる。ナーゲーシャは次のように述べている。

「[反論] 「dhātu」は複数の意味を有するものであるから、「dhātu」は決して二次的に対象表示するものではない。

[答論] このように言うてはならない。なぜなら、[「dhātu」が] 複数の意味を有すると認められるのは、そのある意味を対象とした知に先行して [話者の意図がさもなくば] 説明が見つからないという臆念がない場合であるから。一方、例えば $\sqrt{bhū}$ は進行等に対してはまさに二次的表示機能を有する。この場合、この進行を対象とする知には、先行して [話者の意図がさもなくば] 説明が見つからないという臆念が存する。」²³¹⁾

このように多義性とならんで二次的表示機能によっても、 $\sqrt{bhū}$ は多様な意味を担うことが可能であり、パタンジャリはその意味を本来的なものとして限定することによって二次的表示対象としての意味を排除することを意図しているのである。

さて、 $\sqrt{bhū}$ に関して二次的表示機能や「upasarga」との共使用を考慮しない場合、それ自体から第一次的に理解される意味は〈存在〉(bhavana) である。そして「bhava を表示するものが「dhātu」 [と呼ばれる]」という定義規則における〈bhāva〉が bhāvasādhana (bhāva (行為) を意味する「kṛt」接辞の添加による語形成) によって〈存在〉を意味すると解した場合、一方では、〈存在〉としての bhāva は存在性 (sattā) に他ならず、存在性は普遍的に存在する属性としてすべてのものと基体を同じくするから、同定義に過小適用の誤謬はないと考えられるものの²³²⁾、他方では、存在と相容れない非存在 (abhāva) を意味する項目、すなわち滅 (vināśa) を意味する \sqrt{bhid} 、 \sqrt{chid} 等

に対する術語「dhātu」の適用はないことになるのである。あるものが滅の状態にある時には存在性はなく、滅と存在性の〈同一基体性〉はないからである²³³⁾。

1.4.2.2.1.2. [BHĀṢYA]

さらに $\sqrt{\text{pac}}$ 等に対して術語「dhātu」が適用されるということが結果しないことになる。なぜなら、君は「〈行為〉を表示するものが「dhātu」【と呼ばれる】】という定義規則を検討する際に、 $\sqrt{\text{pac}}$ 等に対して術語「dhātu」が適用可能となるようにそれらが〈行為〉を表示するということを確認するために、 $\sqrt{\text{kr}}$ 【の意味】と $\sqrt{\text{pac}}$ など【の意味】との〈同一基体性〉を提示したが、しかし、それと同じような形で、「bhāvaを表示するものが「dhātu」【と呼ばれる】】という定義規則の検討に際して、 $\sqrt{\text{pac}}$ 等がbhāvaを表示するということを確認するために、 $\sqrt{\text{bhū}}$ の意味と $\sqrt{\text{pac}}$ 等の意味との〈同一基体性〉を]提示していないからである。

$\sqrt{\text{kr}}$ 【の意味】は、 $\sqrt{\text{pac}}$ 等【の意味】と結びついたすべての時間 (kāla) ・すべての人称 (puruṣa) ・すべての数 (vacana) を随伴し、一方 $\sqrt{\text{bhū}}$ 【の意味】は現在時 (vartamānakāla) と単数性 [を随伴する]。

[PRADĪPA]

「すべての人称」：「あなたは何をしているのか」({kim karoṣi}) (2nd sg. pres. P.) 「わたしは料理をしている」({pacāmi}) (1st sg. pres. P.)、 「わたしは何をしましょうか」({kim karomi}) (1st sg. pres. P.) — 「あなたは料理をせよ」({paca}) (2nd sg. imper. P.) 等においては [$\sqrt{\text{kr}}$ の意味の] 人称の随伴は [$\sqrt{\text{pac}}$ 等の意味と結びついた人称とは、二人称と一人称・一人称と二人称というように] 反対 (viparita) である。それもまた [パタンジャリは] 「すべての」({sarva}) という語を言及することによって意図している。

「一方 $\sqrt{\text{bhū}}$ 【の意味】は」：実に、{bhaviṣyati pakṣyati} (3rd sg. fut. P.) {abhūd apākṣīt} (3rd sg. aor. P.) {bhavataḥ pacataḥ} (3rd du. pres. P.) {bhavanti pacanti} (3rd pl. pres. P.) という [言葉遣い] はない。

ノート (29)

「bhāva を表示するものが「dhātu」【と呼ばれる】】という定義規則に関し、

〈bhāva〉を bhāvasādhana によって〈存在〉(bhavana)を意味するとした場合の第二の誤謬が指摘される。 $\sqrt{\text{pac}}$ 等の〈行為〉表示性に関しては、それらの $\sqrt{\text{kr}}$ との意味間の〈一般〉と〈特殊〉の関係に基づく〈同一基体性〉によってその表示性が確立されることが述べられた。それは、「彼がしているところのもの、それは何か」というように〈行為〉の特定化を期待する {kiṃ karoti} という質問に対して、{pacati} というように特殊な〈行為〉を提供する答弁が与えられることを意味した。具体的に言えば、{kiṃ karoti} — {pacati} {kim akārṣit} — {apākṣit} {kiṃ kariṣyati} — {pakṣyati} {kiṃ kurutaḥ} — {pacataḥ} といった人称・数・時制の一致の上での問答の成立が $\sqrt{\text{pac}}$ の〈行為〉表示性確立の根拠であったのである。これと同じように、{ka bhavati} (「誰がいる」) — {pacati} (「彼は料理をしている」) {kiṃ bhaviṣyati} (「何があるであろう」) — {pakṣyati} (「彼は料理をするであろう」) という問答をなすことはできない。ボタンジャリが $\sqrt{\text{pac}}$ と $\sqrt{\text{bhū}}$ の意味間の〈同一基体性〉として提示したのは、{bhavati pacati} {bhavati pakṣyati} {bhavaty apākṣit} であった。ここにおいてはいずれの場合も3人称 (prathamapuruṣa)・単数 (ekavacana)・現在語尾 (IAT) をとった $\sqrt{\text{bhū}}$ ({bhavati}) の使用がみられるのである。

これが示すところのものは、 $\sqrt{\text{bhū}}$ の意味は $\sqrt{\text{kr}}$ の意味のようには質問の対象 (praśnaviṣaya) とはならないということであり、 $\sqrt{\text{bhū}}$ と $\sqrt{\text{pac}}$ は $\sqrt{\text{kr}}$ と $\sqrt{\text{pac}}$ のように〈一般〉と〈特殊〉の関係での〈行為主体〉を基体とする〈同一基体性〉を有することはないということである。したがって、 $\sqrt{\text{pac}}$ と $\sqrt{\text{bhū}}$ の上記の〈同一基体性〉の提示によっては、 $\sqrt{\text{pac}}$ が bhāva の特殊を表示するということは確立されないのである。

追加参考文献・略号

小川英世 [1996] 「Mahābhāṣya ad P1.3.1研究 (7)」『広島大学文学部紀要』

第56巻

注

- 200) 詳細は、小川 [1988, 1989, 1992, 1993] 「研究(1)―(4)」を見よ。
- 201) 小川 [1995] 「研究(6)」を見よ。
- 202) Kaśikā on P2. 3. 37: bhāvaḥ kriyā.
- 203) Mbh ad P3. 3. 18: pacater bhavatau yat tan nirdiśyate. カイヤタによればこれは次のように解釈される。Pradīpa: bhavatau dhātau vācyatvenāvasthitam yat sāmānyam pacā-didhātuvācyaviśeṣasamavetaṁ tat pratyayārthatvena nirdiśyate. (「 $\sqrt{dhātu}$ $\sqrt{bhū}$ にその表示対象として存立し、 \sqrt{pac} 等の「 $\sqrt{dhātu}$ 」の個別的表示対象に内属する〔 \langle 行為 \rangle 〕一般が、[GHaÑ 等の] 接辞の意味として〔 \langle bhāva \rangle 〕という語によって〕表示されている」)
- 204) Uddyota: tasmin saty āgataḥ, bhavanaṁ bhāva ityādiprayogād astyādikriyāpi bhāvapadena grhyate...
- 205) [sati] は P3. 2. 124 により $\sqrt{ās}$ に現在分詞接辞 ŚatR が導入された現在分詞 (sat) ($\sqrt{ās} + \text{ŚatR} \rightarrow \text{sat}$ (P6.4.111)) が (tad) との (同一指示性) に基づいて saptamī-vibhakti Ni をとったものである。
- 206) $\sqrt{ās}$ からの (bhāva) 等の派生には P2.4.52 により (as) に (bhū) が代置されるという段階がある。(bhavana) (bhāva) の派生については、以下の注228を参照せよ。
- 207) Pradīpa on Mbh ad P3. 1. 87: aparispandanāsādhanaśādhyo dhātvartho bhāvah/ sapa-rispandanāsādhanaśādhyas tu kriyā.
- 208) BM on SK2738 (P1. 3. 67):... bhāvaḥ, yathā darśanaśravaṇādih/... kriyā, yathā pākādih. Cf. Kaśikā on P3. 1. 87: karmasthaḥ pacater bhāvaḥ karmasthā ca bhideḥ kriyā/māsāsbhāvaḥ kartṛsthaḥ kartṛsthā ca gameḥ kriyā// (「[\sqrt{pac} から] 理解されるもの」は bhāva であり、それは (目的) に存する。一方 [$\sqrt{bhidyate}$ kusūlah svayam eva] (「 \sqrt{bhid} がまさに自ずと壊れる」) の場合の破壊の意の) \sqrt{bhid} から [理解されるもの] は kriyā であり、それは (目的) に存する。[māsam āste] (「一月の間ずっと座っている」) という場合の $\sqrt{ās}$ から [理解されるもの] は bhāva であり、それは (行為主体) に存する。一方 [進行の意の] \sqrt{gam} から [理解されるもの] は kriyā であり、それは (行為主体) に存する。)
- 209) ヘーラーラーージャはこの運動概念を軸とする bhāva と kriyā の「 $\sqrt{dhātu}$ 」定義との関わりを次のように述べている。Helārāja on VP III, kriyā, k.1: kim ca parispondasvabhāva loke kriyā prasiddhā/astibhavatividyatinām ca na parispondasvabhāvo 'rtha iti sakaladhātuvyāpakam kriyālakṣaṇam bhāṣye praṇītam -- kārakāṇām pravṛttivīśeṣaḥ kriyā iti. (「世間では kriyā とは運動を本質とするものとして知られている。そして $\sqrt{ās} \cdot \sqrt{bhū} \cdot \sqrt{vid}$ は運動を本質とするものを意味しない。故にすべての「 $\sqrt{dhātu}$ 」を遍充する kriyā の定義が kārakāṇām pravṛttivīśeṣaḥ kriyā というように Bhāṣya において説かれている。)」この Bhāṣya の kriyā 定義については別稿で詳論されるであろう。
- 210) Rohathak 本に次の遺漏がある。Uddyota: nanv astyādyarthasyāpi (kriyātve kim aparāddham pūrva-) lakṣanenty āha -- bhāvarūpeti.
- 211) VP III, sādhana, k.66ab: viśeṣadarśanaṁ yatra kriyā tatra vyavasthitā/
- 212) Helārāja on VP III, sādhana, k.66ab: yatra kartari karmaṇi vā viśeṣaḥ kaścit paridrīśyate

tatraiva kriyā vyavasthiteti boddhavyam/saparispandasādhanasādhyā kriyā, aparispandasādhanasādhyo bhāva iti viśeṣam anapekṣya sūtrakārābhīprāyeṇa kriyāpi bhāvo 'bhīdhīyata iti tīkākārasyaabhīprāyaḥ. 「文法規則の定式者 [であるパーニニ] の意図に従って」(sūtrakārābhīprāyeṇa) というのは、ヘーラーラージャによれば、まさしく上で説明したような P3.2.126, 2.3.37におけるパーニニの 〈kriyā〉 と 〈bhāva〉 の同義的な使用に窺える彼の意図のことである。

- 213) kriyā と bhāva の概念について、さしあたり次のことを指摘しておきたい。パタンジャリは、繰り返し「dhātu」の意味とは〈行為〉(kriyā) であると述べ (Mbh ad P3. 2.84, 3.2.115, 5.1.118: kaḥ punar dhātvarthaḥ, kriyā), パーニニは「dhātu」の意味を〈kriyā〉 と 〈bhāva〉 の両語でもって意図していると解して、それらの語によってそれぞれ「dhātu」の意味のどのようなアスペクトが表されるのかを明らかにしようとしている。その表れが、パタンジャリの P3.3.18の支配下に導入される GHaṆ 等の「kṛt」接辞で終わる項目が表示する bhāva が〈実体〉と同様なものとみなされるということを示した言明 kṛdabhihito bhāvo dravyavad bhavati (P2.2.19, 3.1.67, 5.4.19, 6.2.137) であり、「kṛt」接辞である不定詞接辞 tumUN 等が bhāva を意味するという言明 avyayakṛto bhāve bhavanti (P3.4.9, 3.4.26) であり、bhāva の内的 (ābhyantara) ・外的 (bāhya) の区別 (P3.4.67) である。当該 Bhāṣya の解釈にあたりこれらの詳細をここで論ずる必要はないであろう。
- 214) \sqrt{kr} と \sqrt{pac} の間の sāmānādhikarāṇya と同じく、 $\sqrt{bhū}$ と \sqrt{pac} 間のそれも〈同一対象指示性〉(ekārthabodhakatva) ではなく、意味間の〈同一基体性〉である。Uddyota: bhavati pacatiḥ naikārthabodhakatvarūpaṃ sāmānādhikarāṇyaṃ, bhāvaḥ sattā, viklitty-anukūlavāpāraś ca pāka ity atyantavailakṣyaṇyat... (「 $\sqrt{bhū}$ と \sqrt{pac} の間には〈同一対象指示性〉という形の sāmānādhikarāṇya はない。bhāva とは sattā (存在性) のことであり、そして軟化をもたらす〈ハタラキ〉が料理行為であるから両者の間には絶対的な相違があるからである」) 小川 [1995] 「研究(6)」注144参照。
- 215) [bhavati pacati] 等をこのように訳すのは、以下に明らかなようにここでパタンジャリが述べる $\sqrt{bhū}$ の意味と \sqrt{pac} の意味の間の sāmānādhikarāṇya が〈行為主体〉を基体とする〈同一基体性〉であるからである。後でパタンジャリは両者の意味の間の関係を sāmānādhikarāṇya ではなく実現対象と能成者の関係で捉えた解釈を提示することになる。勿論、その解釈によれば [bhavati pacati] 等は「料理行為が在る」といった意味になる。詳細は続稿に譲る。
- 216) ナーゲーシャによればこれには pākatvādibhiḥ という異読がある。Uddyota: tad uktam – pācatvādibhir iti/ādinā gantrtvādi/pākatvādibhir iti pāthāntaram/atradinā gamanavādi. この場合には、料理性 (pākatva) と対立するもの (viruddha) として進行性 (gamanatva) などが捉えられる。
- 217) Uddyota: itaro bhavatyartho 'sya bhāvaśabdena vivakṣita ity āśayena pṛcchati bhāṣye – kathaṃ punar iti.
- 218) VP III, sambandha, k.47: ātmanam ātmanā bibhrad astīti vyapadiśyate/antarbhāvāc ca tenāsu karmaṇā na sakarmakaḥ// ヘーラーラージャは、 $\sqrt{ās}$ の意味を、[ātmanātmanam

- dhārayati] というように説明する。意味するところは同じである。
- 219) Nirukta I.2: astity utpannasya sattvasyāvadhāraṇam [ācaṣṭe].
- 220) Helārāja on VP III, kriyā, k.26: utpannasya sattvasyeti jñmottarakālatām evābhivyanakti /avadhāraṇam niścayaḥ/asty ātmānam bhāvayati/asyāś ca bhāvyaṁānāyāḥ sattāyāḥ santānena pravṛtṭeḥ pūrvottaraḥṣaṇanirodhopajanābhyāṁ saṅgrahaḥ/yāvac ca sadṛśasantānapravāhas tāvad alakṣitaviveko bhāvo 'stity avadhāraṇārtham abhidhiyate / asty ātmānam bibharti eva na dhvaṁsate ity arthaḥ. ここには、以下の詩頌に表明されているようないわば「有の行為化」という存在性そのものを時間的な連続性の仮構のもとに〈行為〉概念に統一しようとするバルトリハリの思想の反映が認められる。VP III, jāti, k.37: ātmabhūtaḥ kramo 'py asyā yatredaṁ kāladarśanam/paurvāparyādirūpeṇa pravibhaktam iva sthitam// (「順序」(krama) もまたこれ [存在性 (satta)] の本質である。この [順序] において次のような時間観 (kāladarśana) [をひとは抱く]。すなわち、[ひとは時間を] 後とか先といった相であたかも区分されているかのように [みなす] のである。』) しかし当該 Bhāṣya の理解のためには、[asti] という表現が [ātmānam bibharti eva na dhvaṁsate] というように事象の存在性への制限を意味するということの指摘で十分である。ここではバルトリハリの形而上学思想にまで立ち入って論ずることはしない。
- 221) VP III, sambandha, k.43: ātmaśābhasya janmākhyā satā labhyaṁ ca labhyate/yadi saḥ jāyate kasmād athasaj jāyate katham// (「自己獲得」が生起と呼ばれる。有なるもの (sat) が獲得対象を獲得する。もし [生ずるものが] 有なるものであるとするなら、それはどうして生じよう。またもし非有なるものであるとするなら、どうして生じよう。』)
- 222) カイヤタは、語の適用根拠 (pravṛttinimitta) としての svārtha を説明する際に次のように述べている。Pradīpa on Ślokaśāntika 1 (Mbh ad P5. 3. 74): śuklādayo yadā tu guṇajātau vartante tadā teṣāṁ svarūpam svārthaḥ, jātir dravyam/yadā tu guṇe vartante tadā guṇasāmānyam svārtha, guṇo dravyam/yadā dravye vartante tadā guṇaḥ svārthaḥ. (「[śukla] 等の [語] が属性の普遍 (guṇajāti) を表示するときには、それらにとって語形が svārtha であり、普遍が dravya である。一方、それらが属性 (guṇa) を表示する場合には、属性の普遍が svārtha であり、属性が dravya である。それらが 〈実体〉を表示する場合には、属性が svārtha であり、[〈実体〉が dravya である。]」) なお、ここにおける dravya とは、名詞化され指示代名詞の指示を受け得るもののことであり、属性・普遍等の基体としての 〈実体〉をも包摂する概念である。Cf. VP III, bhūyodravya, k.3.
- 223) Uddyota: ātmabhāraṇam caṣaṣṭād bhāvavikārād anusūyūtam sad iti pratyayavedyaṁ rūpam, tac ca kevalānavyitvād padārthamātrāsāmānādhikaraṇam/evaṁ caśraye pacikriyābodhe tatsāmānādhikaraṇātmaḥbhāraṇasyāpi tatra sattvena tadvacakatvaṁ pacādīnām/yathā śukle guṇe rūpatvasattāmātreṇa rūpavacanatvaṁ śuklādīnām.
- 224) Uddyota: evaṁ ca pacati bhavatyāder yatkarṭkā pacikriyā tatkarṭkā satteti bodhaḥ/ evaṁ ca bhavatyarthapacatyarthayor *ekādhikaraṇapravṛttitvam eva bhavati pacatyoh sāmānādhikaraṇam iti bhāvaḥ. Nirṇayasāgar 版に従い、ekādhikaraṇapravṛttitvam と訂正。
- 225) 注214を参照。ナーゲーシャは、後の {bhavati pacati} 等における√bhū と√pac の

意味間の〈同一基体性〉提示の問題点の指摘に関連して、 $\sqrt{bhū}$ と \sqrt{pac} の意味間の関係を〈行為主体〉を基体とする〈同一基体性〉の関係で捉えた場合、同義語反復禁止の原則からしてもこのような表現が許されないことを述べている。Uddyota: kiṃ cokto 'rtho 'pi na, pacatīty anenaiva tatkartur vartamānasattvavagatyā bhavatiṣy asyānupayogāt. (「すでに述べた〔料理行為の〈行為主体〉〔すなわち、料理行為の基体〕である x を〈行為主体〉とする存在性 (sattā)』という 意味もあり得ない。なぜなら、[pacatī] そのものによってその [料理行為の] (行為主体) の現在に属する存在性は理解されるから、[bhavati] というこの [語が] 使用されることはないから) さらにナーゲーシャは、〈同一基体性〉の基体を、〈行為主体〉ではなく、料理行為性と存在性が内属するものとしての個別的な料理行為と考えた場合、〈同一基体性〉に依拠しては \sqrt{pac} 等の bhāva 表示性 (bhāvavācakatā) を確立し得ないことを次のように述べている。Uddyota: uktaṃ sāmānādhikarāṇyam api na bhāvavācakatāsādhakam, yathā śuklādīnām rūpavācakatve 'pi na rūpatvavācakatā, tadvat/evam pākatvena sattāyāḥ sāmānādhikarāṇyena paceḥ sadvācakatve 'pi na sattāvācakatvam iti bodhyam. (「上述の [$\sqrt{bhū}$] と \sqrt{pac} の意味間の) 〈同一基体性〉もまた [\sqrt{pac}] の bhāva 表示性を確立するものではない。〈śukla〉等 [の語] が色を表示するものであっても色性を表示するものではないと同様である。このような場合、存在性の料理行為性 (pākatva) との〈同一基体性〉に基づいて、 \sqrt{pac} は存在 (sat) を表示するものであっても、それが存在性を表示するということは [確立され] ない、と理解すべきである。) 「白い色」(śuklaṃ rūpam) においてその意味構造を「ある事象 x に関し、その x は白さでありかつ色である」というように分析した場合、白さという属性を表示する 〈śukla〉 は色を表示しても、それに内属する色性を表示することはない。同様に、[bhavati pacatī] に関してその意味構造を「ある事象 x に関し、その x は料理行為でありかつ存在するものである」というように分析した場合、 \sqrt{pac} は存在を表示してもそれに内属する存在性を表示することはない。

226) P2. 4. 13 vipratīṣiddhaṃ cānādhikarāṇavāci は、「dvandva」複合語は、その構成要素の意味が互いに vipratīṣiddha な関係にある場合、任意に単数とみなされる (ekavat) ことを規定している。Kāśika は例として [sitoṣṇam] (「冷たさと暑さ」)、[sukhaduḥkham] (「快と苦」)、[jīvitamarāṇam] (「生と死」) を挙げる。これからも明らかのように bhāva (存在) に対して vipratīṣiddha なものとは abhāva (非存在) である。

227) パーニニ文法学派においては意味の一次性 (mukhyatva) ・二次性 (gaṇatva) の区分は、意味の習熟性 (prasiddhi) の問題にすぎない (VP II, kk. 263)。語の一次的意味と二次的な意味について、ここでは次のようなバルトリハリの言明を挙げておこう。VP II, kk. 264-65: arthaprakaraṇāpekṣo yo vā śabdāntaraiḥ saha/yuktaḥ pratyāyaty arthaṃ taṃ gaṇam apare viduḥ//śuddhasyoccarāṇe svārthaḥ prasiddho yasya gamyate/sa mukhya iti vijñeyo rūpamātranibandhanaḥ// (「[ある語が] 言明効力 (artha = sāmārthya) や文脈に依存して、あるいは他の語とともに用いられて意味を伝達する場合、別の者たちは、その [語] を二次的な [意味を担う] ものと呼ぶ」「純粹にその [語] 自体が発声されたときによく知られたその [語] 自身の意味 (svārtha) が理

- 解されるような [語] は、語形だけに依拠するものとして、第一次的な [意味を担う] ものと知るべきである。)
- 228) $\{bhavanam\ bhāvah\}$ という $\langle bhāva \rangle$ の派生分析は、その派生のために $\sqrt{bhū}$ に添加される「 $kr̥t$ 」接辞が $\langle 行為 \rangle$ ($bhāva$) の意味を表すということを示している。 $\sqrt{bhū} + GHaṆ$ (P3.3.24) $\rightarrow bhau + a$ (P7.2.115) $\rightarrow bhāva$ (P6.1.78). $\sqrt{bhū} + Lyuṭ$ (P3.3.115) $\rightarrow bho + yu$ (P7.3.84) $\rightarrow bho + ana$ (P7.1.1) $\rightarrow bhavana$ (P7.2.115). 中性形の $Lyuṭ$ で終わる項目は、P3.3.115により $\langle 行為 \rangle$ ($bhāva$) を表示する。 $\langle bhāva \rangle$ を $kartṛsādhana$ ($\langle 行為主体 \rangle$ を意味する「 $kr̥t$ 」接辞の添加による語形成) と解した場合、 $\{bhavattī bhāvah\}$ (「存在するものが $\langle bhāva \rangle$ と呼ばれる」) というように分析される。しかしながら、パーニニの文法規則そのものによってこのような派生は説明することができない。Kāśikā ad P3.1.143は、Vārttika の言明として $\{bhavateṣ ca iti vaktavyam\}$ を挙げ、 $\sqrt{bhū}$ に対する「 $kr̥t$ 」接辞 Ṇ の導入による $\langle 行為主体 \rangle$ を意味する (P3.4.67 $kartari kr̥t$) $\langle bhāva \rangle$ の派生を説明している。SK2905 (P3.1.143) は、この言明を Mahābhāṣya には見いだせないとして Kāśikā に帰し、Bhāṣya の見解としては、 $curādi$ グループ (第10種動詞) 中の $\sqrt{bhū}$ ($dhātupāṭha$ X.300 $\{bhū\}$ $prāptaui$) から派生が説明されるということ述べている。SK2905: $bhavateṣ ca iti kāśikā/bhavo devaḥ saṃsāraś ca/bhāvah padārthāḥ / bhāṣyamate tu prāptyarthāc curādiṇyantād ac / bhāvah$. この解釈によれば、 $\langle bhāva \rangle$ の派生は次のように説明され、その意味するところは、「獲得するもの」となる。 $\sqrt{bhū} + NiC + aC$ (P3.1.25; 3.1.134) $\rightarrow bhau + i + a$ (P7.2.115) $\rightarrow bhāv + i + a$ (P6.1.78) $\rightarrow bhāv + ø + a$ (P6.4.51) $\rightarrow bhāva$.
- 229) 小川 [1996] 「研究(7)」を見よ。
- 230) 小川 [1996] 「研究(7)」にこの「 $dhātu$ 」の多義性の問題が詳しく論じられている。
- 231) Uddyota: $na ca dhātūnām anekārthatvād dhātur na kvāpi lākṣanika iti vācyam, anupapattipratisandhānapūrvakapratīviṣayārtham ādāyāvānekārthatvasvikārāt/yas tv anupapattipratisamdhānapūrvakapratīviṣayo yathā bhūdhātor gamanādis tatra lakṣanaiva...$ ナーゲーシャは、 $lakṣaṇā$ 依拠の根拠のある特定の意味の想定なしには統語関係が説明つかないということ ($anvayānupapatti$) ではなく、話者の意図が説明つかないということ ($tātparyānupapatti$) を求めている。VSLM94: $vastutaḥ tātparyānupapattir eva tad [=lakṣaṇā]-bījam$.
- 232) Uddyota: $bhavanalakṣaṇabhāvasya sattārūpatvāt sattāyāś ca kevalānvayitvena sarvasamānādhikaraṇatayā bhāvavacana iti lakṣaṇam na kvāpy avyāptam ity uttarabhāṣyatātparyam$.
- 233) Uddyota: $vināśakāle sattāyā abhāvan na tena tasyaḥ sāmānādhikaranyam iti bhāvah$. (未完)

A STUDY OF THE MAHĀBHĀṢYA AD P1. 3. 1. (8)

Hideyo OGAWA

SYNOPSIS (8)

1.4.2.1.1. In vt. 5 the objection has been made: If one accepts that what denotes *kriyā* ('action') is called *dhātu* (*kriyāvacano dhātuḥ*), an additional statement should be made that \sqrt{as} , $\sqrt{bhū}$ and \sqrt{vid} are called *dhātu*. In answer to this objection another definitional rule is proposed: That which denotes *bhāva* is called *dhātu* (*bhāvavacano dhātuḥ*). According to Kaiyaṭa, the term *bhāva* in this newly proposed definition is the one used in P2. 3. 37 and P3. 3. 18, meaning act in general (*kriyāsāmānya*), so that the definition can cover items like \sqrt{pac} as well as those like $\sqrt{bhū}$.

1.4.2.1.2. The question is brought up: How can one know items like \sqrt{pac} to denote *bhāva*? The answer is given: In utterances *bhavati pacati*, *bhavati pakṣyati* and *bhavaty apākṣit*, the relation of concurrence (*sāmānādhikarānya*) is found between the meanings of $\sqrt{bhū}$ and \sqrt{pac} , by virtue of which one knows \sqrt{pac} to denote *bhāva*. Since the relation of concurrence in question is such that the meaning of $\sqrt{bhū}$, which Kaiyaṭa directly glosses with *ātmabharāṇa* ('self-maintaining'), and that of \sqrt{pac} have the same locus, that is, the same agent, the utterance *bhavati pacati*, for example, conveys that one who is currently cooking exists. This is merely a tentative answer. Patañjali himself will deny that it is the relation of concurrence that is assumed to hold between the meanings of $\sqrt{bhū}$ and \sqrt{pac} in the given utterances.

1.4.2.2.1.1. The problems are pointed out which arise in connection with the

definition when the term *bhāva* is literally taken as derived from $\sqrt{bhū}$ (*bhavateḥ svapādārthah*).

If the term *bhāva* is analyzed as meaning *bhavana* ('existence') (*bhavanam bhāvavah; bhāvasādhana*), the definition cannot be applied to \sqrt{bhid} ('to destroy') and \sqrt{chid} ('to cut'), which denote the non-existence in the form of *vināsa* ('ruination'), contrary (*vipratīṣiddha*) to the *bhāva*.

1.4.2.2.1.2. Moreover, if the term *bhāva* is so analyzed, the term *dhātu* cannot be applied to \sqrt{pac} . In the case of $\sqrt{kṛ}$ and \sqrt{pac} , one can have the question *kim karoti* ('What action is he doing?') and the answer *pacati* ('He is doing the action of cooking'), which shows that the denotatum of $\sqrt{kṛ}$ and that of \sqrt{pac} abide in the same locus through the relation of the universal and the particular (*sāmānyaviśeṣabhāvena sāmānādhikaranyam*). In the case of $\sqrt{bhū}$ and \sqrt{pac} , however, one may not have such a question-and-answer, as is shown by the consistent occurrence of the same form *bhavati* in *bhavati pacati*, *bhavati pakṣyati* and *bhavaty apākṣīti*. This suggests that the denotata of $\sqrt{bhū}$ and \sqrt{pac} cannot have the relation of the universal and the particular, so that one cannot say that \sqrt{pac} denotes a particular *bhāva*.

(To be continued.)